

保健科教育のオンライン講義における シナリオ型指導案を活用した模擬授業に関する試験的試み

谷 本 英 彰[†]

A Pilot Study about Microteaching that Use a Teaching Plan Writing
Classroom Scenarios in the Online Lecture of School Health Education

TANIMOTO Hideaki

概 要

本学では、保健体育科の教科の指導法に関する科目である「保健体育科教育法」において、受講生が教師役および生徒役を演じながら実施する模擬授業に取り組んでいる。その模擬授業が新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、従来の方法では実施が不可能となった。そのことを受け、オンライン授業時における模擬授業の実施方法の1つとしてシナリオ型指導案を活用した模擬授業を実施し、その成果と課題を明らかにすることを本研究の目的とした。模擬授業後に実施したアンケート調査の結果、授業の流れ（構成）に対する理解を促したり、オンライン場ではあるが人前で話をする機会を得ることの必要性を感じさせたりすることができた。また、シナリオ型指導案を作成する過程を経ることで、授業実施時における学習者の意欲喚起の重要性等を実感させることができた。

キーワード：朗読劇型模擬授業、模擬授業、授業づくり

目 的

本研究では、本学スポーツ健康学部で開講されている教職科目「保健体育科教育法」における同時双方向性オンライン講義にて実施したシナリオ型学習指導案を活用した模擬授業に関する試験的試みについての効果を検証することを目的とした。

[†]大阪産業大学 スポーツ健康学部 スポーツ健康学科 講師

草 稿 提 出 日 7月14日

最 終 原 稿 提 出 日 7月14日

模擬授業とは、教員養成課程にある学生や研修中の教師が、授業の組み立てや指導法などを体験的に学び検討するために、実際の授業を想定した場で実践を模して行う授業である(高橋, 2005)。教員養成課程を有する大学では、各教科の指導法および教育実習の科目において模擬授業を実施し、受講生の授業力向上に努めてきた。しかし、2020年頃から新型コロナウイルス感染拡大の影響により、これまで実施してきた対面方式での模擬授業の実施は困難となり、その実施方法の再検討を余儀なくされた。本研究の対象科目である「保健体育科教育法」においても、これまで対面方式の講義にて受講生による模擬授業を実施してきたが、その実施方法の再検討が必要となった。本講義は、非対面方式での授業を実施することになってからは、オンライン会議ツールの1つであるZoomを使用して、同時双方向性オンライン講義を展開してきた。この形式であれば、オンライン上にてリアルタイムに口頭での意思疎通ができるため模擬授業を実施することは可能ではあるが、通信環境等によっては、音声聞きづらい状況が生じたりするなど、模擬授業の進行が滞り、そのこと自体が課題として認識され、「授業の組み立てや指導法などを体験的に学び検討する」という模擬授業本来の意義を損なう可能性が考えられた。そこで、本研究では、シナリオ型指導案を活用した模擬授業を実施することとした。

シナリオ型指導案とは、映画のシナリオの様式のように教師や生徒の発言や行為を詳細かつ具体的に記したものである(佐藤, 2009)。このシナリオ型指導案を作成し、それをもとに模擬授業を実施すれば、オンライン環境下で生じる障害によって模擬授業の進行が滞ることなく実施され、オンライン環境下でも模擬授業本来の教育効果を得ることができる可能性があるのではないかと考えた。

そこで、本研究では、保健科教育に関する同時双方向性オンライン講義という条件下で、模擬授業の教育的効果をできる限り最大化するための試験的試みとして、シナリオ型指導案の作成とそれを活用した模擬授業を実施し、その効果を検討することとした。

方 法

1. 調査対象

本学スポーツ健康学部で開講されている「保健体育科教育法Ⅲ」を受講した学生77名のうち調査票に漏れなく記入した62名(男子53名, 女子9名)を分析対象とした。

2. 調査方法および調査時期

2021年5月上旬から7月下旬にGoogle社が提供するアンケートフォームサービスであるGoogleフォームを用いて調査を実施した。なお、倫理的配慮に関して、研究の目的の説明

保健科教育のオンライン講義におけるシナリオ型指導案を活用した模擬授業に関する試験的試み（谷本英彰）

および得られたデータを集計以外に用いることはなく、プライバシーが保護されていること、調査への回答は自由意志であり、いつでも回答を中止できることをGoogleフォーム上に明記した。

3. 講義の概要

本科目は、3年次開講の教職科目（各教科の指導法に関する科目）の1つであり、学習指導要領にもとづいた保健または体育の学習指導案の作成および模擬授業を実施することを通して、中学生または高校生に生涯にわたって心身の保持増進に関わる資質・能力を身に付けさせることのできる保健体育科の授業者となるための基礎を培うことを目標としている。本研究の対象となる保健に関する講義は、全15回のうち4回の講義で構成された（表1）。

模擬授業は、シミュレーション・シート（写真1）と名付けられたシートを用いて、シナリオ型指導案を作成した上で、朗読劇形式で実施することとした。なお、シナリオ型指導案の作成およびそれを活用した模擬授業の実施について受講生には「授業の台本を作成し、それをもとに授業場面を演じるように模擬授業を実施する」と説明した。受講生を4～5名ずつのグループに分け、そのグループの中で教師役と生徒役を設定した上で、授業の学習過程（導入、展開、終末）のうち導入の部分について、各々の役割に応じたセリフや動き等をグループ内で話し合いながら構想するよう指示した。

講義は、すべてオンライン会議ツールの1つであるZoomを利用して、同時双方向性オンライン方式で実施された。各グループで模擬授業を構想する際にはZoomのブレイクアウトルーム機能を使用して、グループごとに話し合いができる場を設定するとともに、話

表1 講義の流れ

| | 本時の課題 | 詳細 |
|-----|------------------------|---|
| 第1回 | 保健科教育の意義と授業づくりに際しての留意点 | 保健科教育が学校教育で取り扱われている意義や授業づくりおよび授業実施に際しての留意点などを学習指導要領をもとに解説する。 |
| 第2回 | 模擬授業の構想 | 学習過程における導入の意義について解説する。また、前時で学習した事項を踏まえながらグループごとに模擬授業を構想する。 |
| 第3回 | 模擬授業の実施 | 前時で作成した模擬授業を実施する。 |
| 第4回 | ふりかえり・学習指導案の作成について | 前時で実施した模擬授業のふりかえりを実施するとともに、模擬授業づくりの際に作成したシミュレーション・シートを利用して学習指導案を作成する。 |

| 授業シミュレーション・シート | | |
|----------------|---------------|---------------|
| メンバー | | |
| 活動内容 | 教師の言動（セリフや動き） | 生徒の言動（セリフや動き） |
| | | |

写真1 シミュレーション・シート（シナリオ型指導案）

し合いの最中に疑問等が生じた場合はブレイクアウトルーム時に使用できるヘルプ機能を使用して、講義担当教員を呼ぶように指示した。受講生が話し合い活動に従事している間、講義担当教員は各ブレイクアウトルームを巡回しながら活動の進捗状況の確認や活動促進のための支援を行った。

グループごとに構想した模擬授業はZoom上で発表することとした。模擬授業を実施の際には、その模擬授業内での教師役と生徒役とのやりとりを視認しやすいように授業担当教員および模擬授業を発表するグループの受講生以外の者はカメラとマイクをオフにし、観察者として教師行動に関する測定や授業の所感をまとめる等の活動に従事した。観察者としての活動記録は本学で使用しているLMS (Learning Management System) であるWebClass上に課題として提出させた。

4. 調査内容

まず、シナリオ型指導案の作成に関するグループ活動の参加度と達成度について3段階評定(参加度:「台本づくりの話し合いに意欲的に参加しましたか?」1. ほとんど話し合いに参加していない~ 3. とても意欲的に話し合いに参加した; 達成度:「台本づくりの話し合いはうまくいきましたか?」1. うまくいかなかった~ 3. とてもうまくいった)で評価をしてもらうとともに、その評価に至った理由を自由記述形式で回答してもらった。

次に、シナリオ型指導案の作成とそれを使った朗読劇型模擬授業が学習過程についての理解をどの程度促したかを「台本の作成と発表を通して、導入に対する理解はどの程度深まりましたか?」という質問に対し、4段階評定(1. まったく深まっていない~ 4. とても深まった)で評価してもらった。また、シナリオ型指導案の作成や朗読劇型模擬授業がどの程度役に立ったと感じているかを4段階評定(1. まったく役に立たないと思わない~ 4. とても役に立ったと思う)で評価してもらうとともに、その評価に至った理由を自由記述形式で回答してもらった。

結果および考察

まず、模擬授業の構想および模擬授業で使用するシナリオ型指導案の作成に関するグループ活動の参加度に関して「とても意欲的に話し合いに参加した」と回答したのは44名(70.97%)、「まあまあ意欲的に参加した」と回答したのは16名(25.81%)、「ほとんど話し合いに参加していない」と回答したのは2名(3.23%)であった。また、シナリオ型指導案作成の達成度については「とてもうまくいった」と回答したのは44名(70.97%)、「まあまあうまくいった」と回答したのは15名(24.19%)、「うまくいかなかった」と回答したのは1名(1.61%)であった。さらにグループ活動の参加度とシナリオ型指導案作成の達成に関する自由記述を確認したところ、「グループのみんなでしっかり話し合うことができた」「テーマ(医薬品の適正利用)に対する導入でなにを含めたら良いのかを1人1つ以上意見を出し合い共有できたからです」など、グループの構成員がそれぞれの意見や提案を出していた様子がうかがえる。さらに、「授業後も同じグループの人と何度も連絡をとり合って計画したから」といったように、授業外でも自主的に課題に取り組んだグループもあった。一方で「話さない人がいた」「4人中2人しか案を出さなかったのでみんなが案を出せたらもっとよかったと思った」など話し合いに参加しない受講生がいたことにより、参加度や達成度の評価が下がっている様子も見受けられた。グループで話し合い活動を実施する際に、意見が偏ったり、話し合いが滞ったりするという事態はしばしば発生する。そ

のような事態が発生したときにそのグループの話し合い活動を促進するためのファシリテーターが必要となるが、その役割は講義担当教員が担うことが多い。講義担当教員は本研究においては、各ブレイクアウトルームを巡回しながら活動の進捗状況の確認や活動促進のための支援を行ったり、ブレイクアウトルーム時に使用できるヘルプ機能で呼ばれたルームに移動し、話し合い活動の支援を実施したりしていたが、そのような支援を講じている間は、他のグループの活動状況をうかがい知ることができない。つまり、通常の対面式授業でグループ活動を実施する際は、すべてのグループの活動状況を同時に観察しながら、1つのグループに対して個別的支援を行うことができるが、オンライン上での話し合い活動では、それを実施することができない。このような理由から、本研究において講義担当教員がファシリテーターとしてうまく機能しなかった場面があったといえる。このような課題を解決するには、複数グループにおけるオンライン上での話し合いの様子を同時に観察できる機能を有したサービスを使用するか、ファシリテーターとしてうまく機能するよう各グループを巡回する頻度を増加させ、1回あたりの滞在時間を短縮するなど講義担当教員の行動を修正する必要がある。また、「話さない人が本当にそれでいいのかが分からず、戸惑ったことが何度もあった」という意見があった。対面方式の授業であれば、グループ活動において意見を出さないメンバーがいたとしても、傾きや表情、目線などから多少なりとも意思をくみ取ることが可能であるが、オンライン上では、そのような非言語的情報を取得することが困難な状況となる場合もあるため、受講生も対面方式の話し合い活動と比較して、オンライン環境下での話し合い活動の方が困難であると感じていた者もいたようである。

次に、本講義での活動を通して、学習過程（導入）に対する理解がどの程度深まったかを調査した結果、「とても深まった」と回答したのは38名（61.29%）、「ある程度深まった」と回答したのは24名（38.71%）であり、受講生全員が理解の深まりを感じていた。また、台本作成や朗読劇型模擬授業がどの程度役に立ったと感じているかを調査した結果、「とても役に立ったと思う」と回答したのは51名（82.26%）、「ある程度役に立ったと思う」と回答したのは11名（17.74%）であり、受講生全員が本講義での活動が役に立ったと感じていた。学習過程の理解の深まりや本研究の活動への評価が高かった理由について検討するため、上述した2点に関する評価の理由（自由記述）をもとにテキストデータ分析ソフトKH Coderを用いて分析した。

まず、形態素分析を行い、本研究の評価に関する自由記述に含まれる語とその出現回数を確認したところ、90文が抽出され、その文の中には249語の単語が使用されていた。そのうち、出現回数が多い上位20語を整理すると「授業（35回）」「導入（29回）」「感じる（26

回)」「生徒(23回)」「思う(19回)」などの語が出現していた(表2)。

さらに、各形態素の関連性を確認するために共起ネットワークを作成したところ、5つのサブグラフが出現した(図1)。

まず、「導入」「生徒」「興味」などで構成されるサブグラフと関連する受講生の自由記述を以下に記す。

表2 本講義に関する所感における抽出語

| 抽出語 | 出現回数 | 出現率 |
|-----|------|-------|
| 滑る | 40 | 2.35% |
| 行く | 29 | 1.70% |
| 履く | 29 | 1.70% |
| ブーツ | 28 | 1.65% |
| 学ぶ | 27 | 1.59% |
| 実際 | 25 | 1.47% |
| 行う | 23 | 1.35% |
| 授業 | 22 | 1.29% |
| 感じる | 21 | 1.23% |
| 初めて | 18 | 1.06% |
| 楽しい | 17 | 1.00% |
| 知る | 17 | 1.00% |
| 実習 | 16 | 0.94% |
| 雪 | 15 | 0.88% |
| 体験 | 15 | 0.88% |
| 歩く | 15 | 0.88% |
| 難しい | 13 | 0.76% |
| マット | 12 | 0.71% |
| 板 | 12 | 0.71% |
| 機会 | 11 | 0.65% |

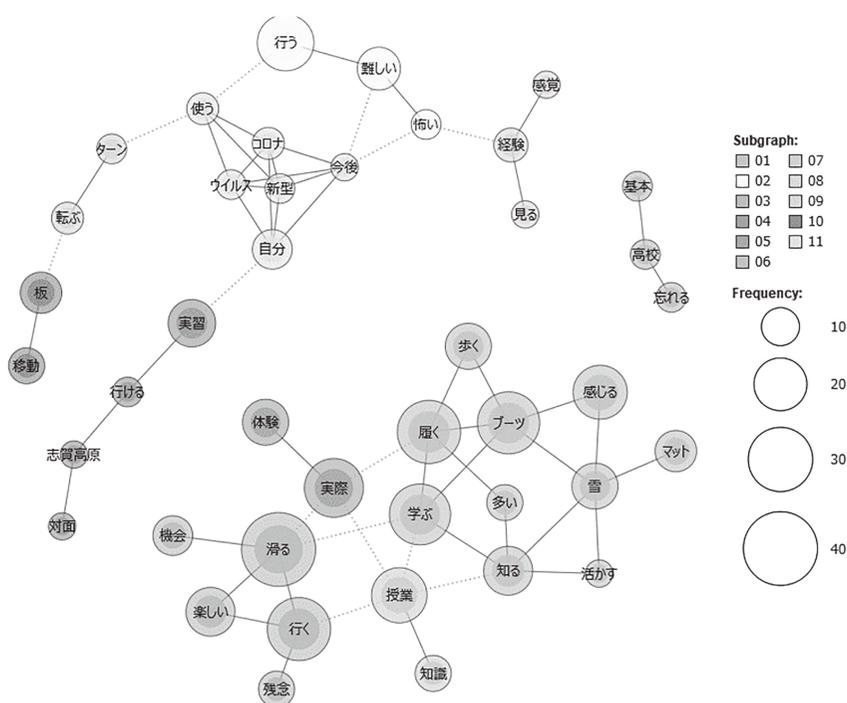


図1 本講義の所感に関する共起ネットワーク

- ・授業の**導入**は**生徒に興味を持たせる**ためにとても重要であると感じた。授業は生徒と作るものであると考えるので、生徒とのコミュニケーションは改めて大切であると思った。一方的な**話**ではなく、生徒の身近な**話**をすることで生徒も話の内容として**学習**しやすいのではないかと感じた。
- ・**導入**から**展開**にもっていくときに、**児童生徒の興味**の引き出し方が理解できたので、そこは成長したと思います。
- ・**導入**として1つのものと捉えるのではなく、授業の流れの中の**導入**と考えることによって、その後の授業のための**導入**を考えることができた。生徒が**学習内容に興味**を持ったり授業に集中したりできるかどうかは、この**導入**で決まるのでとても大切だと思った。ここで**学習**したことを活かせるようにしたい。

本研究では、学習過程（導入、展開、終末）のうち導入の部分を読劇型模擬授業として実施することとしていたことから、導入の役割や機能について授業内で解説していた。このサブグラフに関わる自由記述をみると、導入の役割や機能について講義内容として理解するだけでなく、実践知として昇華させている、または昇華させようとしている様子がうかがえる。同様の傾向は、「発表」「台本」「作成」などで構成されるサブグラフからも確認できた。このサブグラフと関連する受講生の自由記述を以下に記す。

- ・**台本**を**作成**して**発表**するだけですが少し先生が僕らの前に立って授業をどのようにやっているかが**理解**できたと感じました。
- ・この**台本作成**と**発表**を通じて、最初はあまり**台本**づくりなどわからなかったことも、教員を目指していくうえで必要なことが、だんだん講義をうけているうちに**理解**できたことはとても良かったと思います。
- ・**台本**の**作成**をしていくにつれ内容を深く**理解**できた。

中央教育審議会（2015）は「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」において、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成の必要性について言及しており、その育成過程における実践の場は、教育実習や学校インターンシップを位置づけている。しかし、本研究において小規模ではあるが、受講生が理論と実践を往還し、実践的指導力を高めたもしくは高めようとした片鱗がうかがえる。以上のことから、模擬授業の実施方法を工夫すれば、その効果は小規模ではあるが、教育実習や学校インターンシップと同様に実践的指

導力を高める場となりえるだろう。

次に「意見」「聞く」「班」などで構成されるサブグラフと関連する受講生の自由記述を以下に記す。

- ・ **他の班の意見を聞く**ことで、いろいろなやり方があると感じ、次回やるときに、工夫ができると感じた。
- ・ 自分たち以外の**班の意見も聞いて**違う視点からのやり方もあったので参考になった。

本研究では、中学生を対象として保健分野の一単元である「医薬品の適正利用」について各グループで模擬授業を構想した。すべてのグループが同一単元を取り扱ったのだが、その単元に対するアプローチの仕方（模擬授業の内容）はグループごとに異なっていた。そのアプローチ方法の違いを模擬授業の観察者として捉えていたことがうかがえる。同様の傾向は、「流れ」「見る」「方法」で構成されるサブグラフからも確認できた。このサブグラフと関連する受講生の自由記述を以下に記す。

- ・ 他のグループの発表を**見て**、医薬品の実物を用意した方が伝わりやすいことや話の展開方法がうまくいっているところや少しわるいところの差を**見る**ことができた。これまで**流れ**で行っていきなと思っていたがしっかりと導入から展開へなどが必要であると思った。
- ・ 導入のやり方や**流れ**をそれぞれの班が作ったものを見ていくことで、自分では思いつかない**方法**を見つけることができたと感じた。

これらの記述から、オンライン上での模擬授業であろうとも、対面方式の授業と同様に模擬授業の観察者として授業に参加し、十分な学びを享受できる可能性があることがうかがえた。

また「機会」「人前」「必要」で構成されるサブグラフからも、本研究が対面方式の授業と同等の効果を得られる可能性を有していることがうかがえた。このサブグラフと関連する受講生の自由記述を以下に記す。

- ・ **人前**でしゃべるということは教員になるために必ず**必要**な要素だと思います。それを実践できてよかったです。非常に良い経験になりました。これからも**人前**でしゃべる**機会**を学生に沢山提供してもらいたいです。

・人前で話をする機会がほとんどない状況なので、授業とはいえその環境でできたことは教師になる上で**必要**な経験だったと感じた。

模擬授業とは、教員養成課程にある学生や研修中の教師が、授業の組み立てや指導法などを体験的に学び検討するために、実際の授業を想定した場で実践を模して行う授業であり(高橋, 2005), 講義等で模擬授業を実施する場合には、受講生の中から教師役と生徒役、場合によっては授業観察者を設定する。そのため、特に教師役の場合は、実際に教育現場で行われる授業と同じように受講生の前に立って教授行動をとることから、人前で話をするという体験をすることとなり、その経験は教育実習での実地授業等のレディネスを高めるといふ観点から意義のあることだといえる。本来、対面方式の授業では当然のようにこのような体験活動を実施し、教育実習に備えていた。しかし、本講義の受講者は、翌年に教育実習を控えていたが2020年度から続く新型コロナウイルス感染拡大の影響で、授業の大半が非対面方式で実施され、模擬授業などの人前での発表はおろか、受講生同士で対話をする機会がほとんど与えられなかった。そのような状況が影響していた可能性は否めないが、オンライン方式の授業という状況下で人前にて話をした、または発表したという感覚を味わうことができた様子がうかがえる。

以上のように、新型コロナウイルス感染拡大により対面方式での授業が実施できない状況下で模擬授業を構想する際、その授業内で教師および生徒の言動を示した台本を作成し、その台本を使用して朗読劇形式で模擬授業を実施するという実践をオンライン方式の講義で試みた結果、ある程度は対面方式の授業と同様の効果を得ることができる可能性があることが示唆された。しかし、オンライン方式の講義で本研究を行う場合には、特に台本作成の過程における受講生に対する学習支援に関しては、グループ活動中の全体指導は困難であるため、高頻度で各グループを巡回し、個別指導の機会を充実させる必要がある等の対面方式の講義とは違った支援策を考える必要がある。このオンライン方式の講義独自の学習支援策については、今後も検討が必要である。また、本研究は、テキストデータを用いた質的な検討にとどまっており、推測の域を出ない。したがって今後は量的なデータの分析、さらには縦断的なアプローチを用いながら実証的に検討していく必要がある。

文 献

中央教育審議会(2015) これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)。

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/

保健科教育のオンライン講義におけるシナリオ型指導案を活用した模擬授業に関する試験的試み（谷本英彰）

2016/01/13/1365896_01.pdf (2022年7月9日閲覧)

木内剛 (2005) 模擬授業. 日本教育方法学会編, 現代教育方法辞典: 図書文化, 506.

佐藤英二 (2009) 授業作りを教える方法としてのシナリオ作成の意義. 教員養成学研究, 5, 19-28.